

イレーネ・ネッタ著 デルフトのフェルメール
-画家とその都市-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野島, 健児 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18073

デルフトのフェルメール — 画家とその都市 —

イレーネ・ネッタ 著
野島健児 訳

17世紀のデルフト市 — フェルメールのデルフト市史 —

デルフト市はフェルメールが生きていた時代にすでに、街壁や防衛上の施設を備えた、波乱に富んだ長い歴史をもつ、文化的にも社会的にも特色のある町であった。オランダの政治的発展にとってのデルフトの歴史的意義と、オラニエ家と市との緊密なつながりを証明するためには、16世紀に遡らなければならない。

オランダは全体としてはもともと現在のオランダとベルギーを含む17の州から成っていた。多くの伯爵領、公爵領、司教区領を擁していたが、16世紀前半のカール五世による治世開始から1548年までのあいだに徐々にひとつにまとまっていったのである。1556年カール五世は息子のスペイン国王フェリペ二世にこれら17州を含むオランダという複合国家の支配権を譲り渡した。同じころ北ヨーロッパに起こった宗教改革による精神上ならびに宗教上の急激な変動および騒乱がオランダをも襲う。引き続き起こった反宗教改革の流れの中で、スペインはローマン・カトリックの権威を保つためにオランダに対する圧力を強めていった。フェリペ二世は、カール五世の信頼厚いオラニエ公ウィレムを、強い権限をもつ総督に任命する。総督は、エフモント伯ならびにホルン伯と共同で可能なかぎり寛容な政治を心がけたの

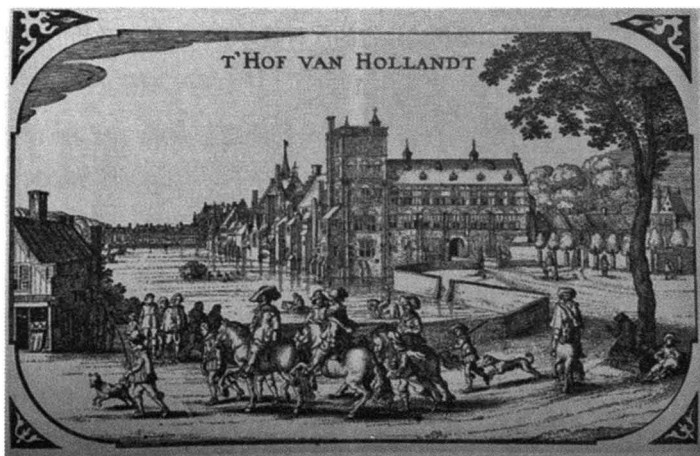


クラス・ヤンスゾーン・フィッシャー
「オラニエ公ウィレム騎馬像」
「17州壁掛け地図」1636年より

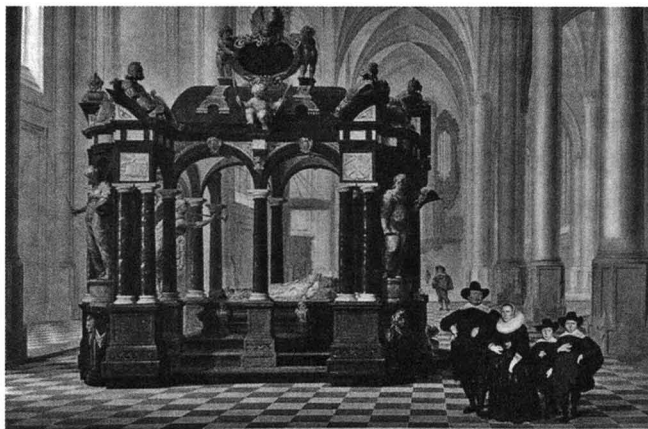
であるが、パルマ公妃マルガレーテとその右腕グランヴェル枢機卿ら反対勢力に抗することができなかった。軍事的手段を使ってでも支配権を貫徹しようとするスペインの要求は、オランダの貴族たちにとっては、これまで受け継いできた身分上の自由が大幅に制限されることを意味した。スペインの強権支配および異端審問に対するオランダ側の抵抗は1566年のプロテスタント民衆による聖画像破壊において頂点に達した。フェリペ二世はただちに反撃する。アルバ公爵率いる軍隊をオランダに派遣し、強引に秩序を回復させようとした。多くの者が処刑された。その中にはエフモント伯とホールン伯もいた。オラニエ公ウィレムはドイツへ逃亡せざるを得なかった。ヘッセンのディレンブルクにある先祖代々の城から彼は、スペインの独裁政治、アルバ公爵とその軍隊、および自分自身の貴族としての特権の侵害に対して、公然たる抵抗活動を組織した。1572年彼は、12の市からホラント、ゼーラント、ユトレヒトを治める権限をもつ総督に選出された。1580年、フェリペ二世がオラニエ公ウィレムの首に賞金をかけた時、オランダの北部諸州はハーグのビネンホフに集結して、スペイン国王を拒否し、ウィレムを摂政に任命

した。ウィレムはスペインの攻撃から身を守るには比較的安全であると思われたので、政府所在地をハーグのビネンホフから、かつて聖アガタ修道院があったデルフトのプリンセンホフに移した。事実、彼はこの地にいたおかげで数回の暗殺の企てから免れ、生きのびたのである。

1579年、北部7州 — ホラント、ゼーラント、ユトレヒト、ヘルダーラント、オーファーエイセル、フリースラント、フローニンゲン — はオラニエ公ウィレム一世の指導下にユトレヒト同盟を締結し、1581年スペインとハプスブルク家から最終的に離脱し、北部ネーデルラント連邦共和国（現在のオランダ）を設立した。残りの南部10州はアントワープを含めて、1585年、スペインから派遣されていた指導者がアルバ公からパルマ公アレクサンドロ・ファルネーゼに交代した後、スペインの支配下に残った。こうしてブラバントとフランドルの間からホラントに至る境界線が北部諸州と南部諸州の最終的な境界となった。これはネーデルラントを、根本的かつ構造的にまったく異なる二つの部分に分割することとなった。1609年から1621年にかけての停戦期に北部諸州は独立を主張し、結局1648年のウェストファリア条



クラス・ヤンスゾーン・フィッシャー
「ハーグのビネンホフ」 「17州壁掛け地図」 1636年より



ディルク・ファン・デーレン「オラニエ公ウィレム一世の霊廟」
1645年

約において国際的に承認された。

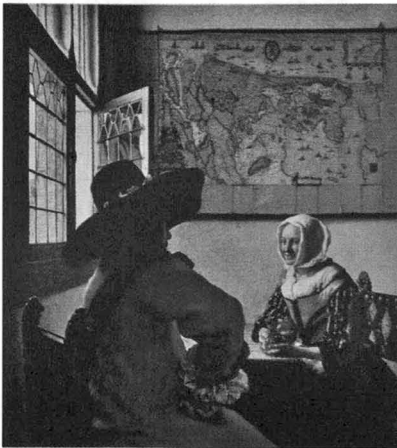
1584年にウィレム一世がデルフトのプリンセンホフで殺害された後、オラニエ家の後継者は、1575年以来北部ネーデルラント連邦の首都であったハーグのビネンホフに戻った。それでもなおデルフトはこの後もオラニエ家とは近い関係にあった。ウィレム一世はデルフトの新教会に埋葬された。教会内陣には、北部諸州の帰趨に決定的な貢献のあった彼の政治的偉業を記念して、1622年壮大な霊廟が建立された。

1647年に総督フレデリック・ヘンドリックが亡くなり、その直後その息子ウィレム二世が亡くなると、共和国は1648年から1672年まで総督が不在となった。この予期せざる展開により国内の貴族にも国政を司るチャンスが生じた。ヤン・デ・ウィットが国政の長を担った1653年から1672年の間—ヨハネス・フェルメールの主要な創作期—は国内の政治が長らく平和を維持し、経済的にも全盛期であった。オランダ東インド会社およびアフリカとアメリカの植民地所有により北部ネーデルラント（現在のオランダ）は暫時ヨーロッパの制海権を握り、海上交易をほしいままにした。イギリスよりも多くの船団を所有し、「黄金時代」と謳われた。海外貿易の繁栄と自由市場経済

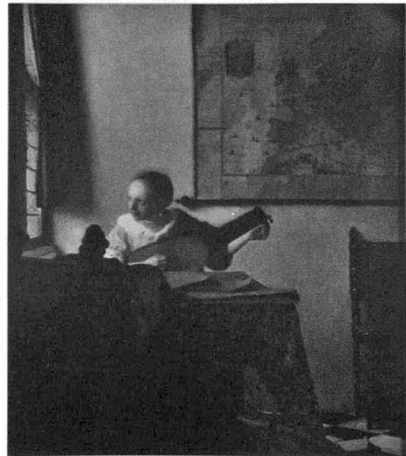
のおかげで精糖、タバコ製造、醸造、造船、繊維など多くの新しい産業が生まれた。デルフト焼きの名で現在もなお世界によく知られている製陶業が興ったのもこの時代である。

交易は地図、海図、地球儀、地図帳の製作を促進した。北部ネーデルラントは制海権をもつ貿易大国として、自国の領土拡大および制海権維持の手段たる地理学に強い関心を抱く。オランダは地図や地図帳の印刷産業と出版市場をリードした。さらに、国民が新たに手にした政治的自信は、17世紀オランダの地図や市街図に対する人気に反映する。フェルメールの数点の室内画のなかには北部7州を描いた大きな地図が認められる（「兵士と笑う女」「窓辺でリュートを弾く女」参照）。個人の家や市庁舎のような公の建物に飾られる地図や市街図は、道順や方角を案内するためのものではなく、特別に大型であることが暗示するように、市や国の栄誉を誇示するための記録なのだ。

昔の地図がはっきり示しているが、ホラント州の個々の都市間の距離はあまり大きくはない。しかも広範囲にわたる水路網によって手軽に往き来でき



「兵士と笑う女」



「窓辺でリュートを弾く女」

ることもわかる。デルフトと周辺の都市との間には人や物資を運ぶフェリーがきちんと定められた時刻表に従って運行していた。国内の都市間の連絡は支障のないように整えられていたのである。デルフト市街図を見ると、市壁で囲まれた内側もほとんど水上交通で通行できたことがわかる。堀や運河が四通八達していたので、当然多くの横断道路が必要となるが、デルフトにはたくさんの小さな橋がかかり、日用品や食料の運搬に不都合はなかった。たいていの職業は、特に手工業は、自宅で営まれていた。作業場や店は一階にあり道路に面していた。居住する部屋は奥の中庭に面しているか、あるいは二階以上にあった。ピーテル・デ・ホーホ、エマニュエル・デ・ウィッテ、ピーテル・ヤンセンス・エリンハやその他多くの地方画家たちもその室内画において、デルフトの当時の街路や屋内の日常生活を生き生きとした描写でとらえている。

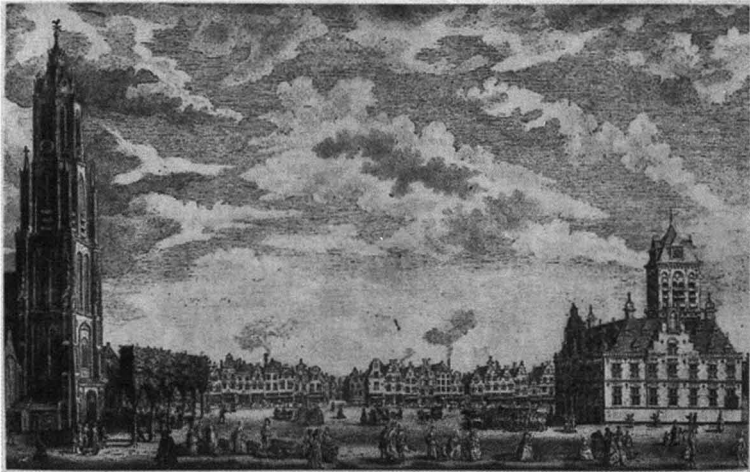
デルフトの外観は多くの運河と 24 もある塔や水車小屋によって特徴づけ



ピーテル・デ・ホーホ
「中庭の女主人と召使い」1660/61年頃
(注・「女主人と召使い」という名が日本
では一般的らしい)

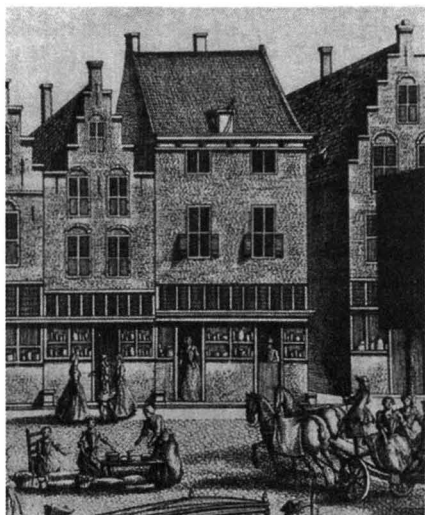


ピーテル・ヤンセンス・エリンハ
「掃除する女」
(注・「オランダの室内」という名が日本
では使われているらしい)



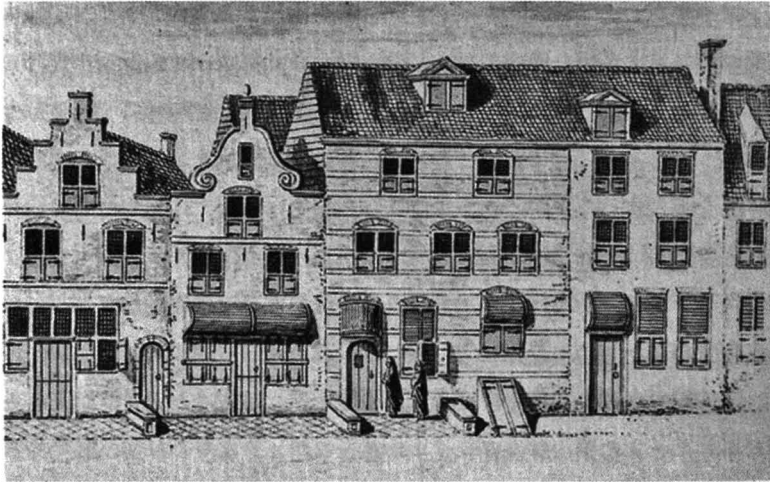
作者未詳「市庁舎と教会のあるデルフトのマルクト広場」1765年

られ、防備が固い要塞都市という印象が強い。外から街の中へ入ることが許されるのは、水路の重要な個所に設けられていた七つの大きな門を通る以外にはなかった。古い地図を見るとよくわかるが、南部の主要な通路は港をひかえたスヒーダム門とロッテルダム門であった。東門と北部にあったハーグ門からは陸路がハーグ、ライデン、ハーレム、アムステルダムへと通じていた。したがって、フェルメールが題材に選んだ眺望は当時最も重要な町の入口であった。町をぐるりと完全に包囲している壁のなかでは、旧教会、その向かいにある「古デルフト」運河に沿うプリンセンホフ、市の中心のマルクト広場に面した新教会と市庁舎が、デルフトで最も重要な建築物である。市庁舎はもとは14世紀の建造であったが火事で焼け、昔のまま残っているのは塔のみにすぎない。現市庁舎は、新教会にあるウィレム一世の墓標を彫刻したヘンドリック・デ・ケイサーが、1618年にルネッサンス様式で再建したものである。町の中心をなすマルクト広場では決まった曜日に市が立ち、多くの催し物が行われる。すでに言及したが、フェルメールの父親が1641年に入手した旅館「メーヘレン・イン」もこの広場に面して建っていた。多



アーブラハム・ラーデマーケル
「メーヘレン・イン」
(「マルクト広場の風景」部分)
1720年頃

くの家並みの上にデルフトで二つしかない大きな教会である旧教会と新教会の
高い塔が聳えているのは今も変わらない。ゴシック様式の旧教会の建築は
すでに 13 世紀に始められた。マルクト広場で市庁舎に向かい合っている新
教会は 14 世紀の末に木造の教会として建てられた。現在のゴシック様式に
よる石造になるのは 1496 年のことであった。両教会ともかつてはカトリッ
クの教会であったが、宗教改革期の聖画像破壊以後カルヴァン派の教会に改
装された。カルヴァン主義は 17 世紀の北部ネーデルラント連邦全体で優勢
な宗教であるが、公式に国家宗教として宣言されたことはない。ルター派、
ユダヤ教、メノー派など他の宗派の共存も許容されていたが、ただカトリッ
クのみは公的に禁止されていた。にもかかわらず数多くのカトリックを信仰
する裕福な市民が、オランダ全体、もちろんデルフトにも定住していた。多
くは南部ネーデルラントからの亡命者であったが暗黙のうちに許容されてい
た。大きな礼拝所はあきらめなければならなかったが、ミサを行うことはで
きた。ミサの挙行は公然の秘密であった。デルフトではカトリック教徒は
「アウエ・ランゲンディク」というマルクト広場の南側にある運河を臨む家

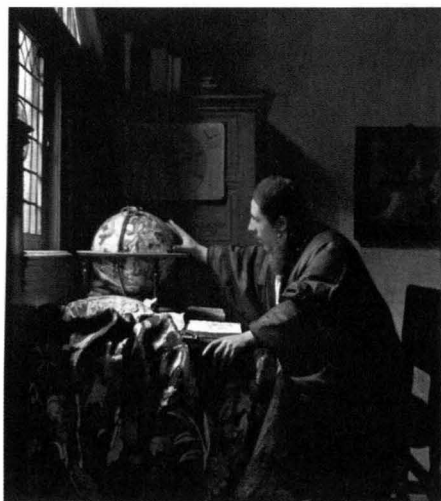


アーブラハム・ラーデマール「デルフトのイエズス会教会」1720年頃

に集ってミサを開いた。今はこの建物は残っていない。このあたりには多数のカトリック教徒が居住していたので「教皇横町」と呼ばれていた。

ネーデルラントの南北における政治的、経済的、宗教的相違は両地域ともに美術の発展に好結果をもたらした。南部では依然として教会や君主や貴族が芸術家にとってパトロンとして残っていたし、北部においては美術の自由市場が発達した。すなわち、画家は絵の注文を受けていなくても、自分で、あるいは画商を介して売れる期待をもって描いたのである。自由市場はしかし定収入を保証するものではないので、北部ネーデルラントに住むたいの画家は画業のかたわら、少数の例外を除いて、必要な生活費を稼ぐために副業を持っていた。公の建物を飾る大作を注文するのは、相変わらず自治体、ギルド、その他私立ならびに公立の機関であった。歴代の総督たちはオランダの芸術家にとってはきわめて限定的な注文主であった。一人としてフランス・ハルス、ヨハネス・フェルメール、ヤン・ステーン、ヤーコブ・ライスダールの作品を収集した者はなく、援助した者もない。オラニエ公家の人々は、いかにも支配者の家らしいことだが、とりわけペーター・パウル・ルー

ベンスやアントニー・ファン・ダイクに代表されるような、フランドルの伝統的なバロック芸術を愛好した。しかしながら北部ネーデルラント連邦の市民は、経済が飛躍的に発展したおかげで、生活に潤いを与えてくれるばかりでなく、所有することによって自分たちの社会的地位を高めてくれもする芸術作品を購入することができるようになってきた。新たに生まれたこのような顧客の需要に応じて、絵画のテーマやモチーフも変化する。カトリックの南部ネーデルラントとは逆に、カルヴァン派の北部では宗教的な題材はほとんど需要がなかった。視線が向けられたのは、街路や広場のたたずまい、あるいは旅館や食堂の内部、中庭や家庭の様子など、人々が日常生活を営む場所であった。また華美なゴブレット、エキゾチックなフルーツ、技巧を凝らしたグラスなど、高価で貴重な品々も題材に加わった。新たに生まれた自尊心が、人々の関心を彼ら自身および彼らの生活自体に向かわせたのである。ところで、この時代のおびただしい数の風俗画や室内風景画は、典型的なオランダの絵画様式の単なるコピーではない。むしろ彼らの独自の生活を反映した、誇りと自信を表現するものである。同じことはまた、17世紀に北部



「天文学者」

ネーデルラントで描かれた多くの都市風景画についてもいえる。そこには独自の歴史と文化に対するアイデンティティを確認するための新しい方式が映し出されているのである。こうしたことは17世紀の南部ネーデルラントでは、まったく異なる政治情勢のために、想像すらできないことであっただろう。

フェルメールの世界 — 画家の意図

歴史を回顧してわかることは、フェルメールの主要な創作期である1650年から1670年という期間は、どのような点から見ても、オランダ共和国ならびに画家の故郷であるデルフトが繁栄した平和な時代であったということである。経済が成長し、都市も農村も豊かに潤い、フェルメールとその家族の暮らし向きもよかった。それゆえ、歴史的、政治的および個人的理由からもフェルメールが大作の画題として故郷デルフトの風景を選んだと推測するのは自然なことであろう。このようにして題材を選択したフェルメールが、郷土デルフトに対する親密な愛情をここに表現したことは疑いの余地がない。それゆえ、陽光に明るく照らし出されている新教会の塔は象徴的な意味をもつかもしい。だからといって政治的に明確な立場に立とうとする興味はフェルメールにはなかったようである。そうでなければ、彼は多くの同時代の画家がそうしたように、新教会をもっと絵の前面に出して描いたであろう。そのかわりにフェルメールは、全体を一様に描いた町のシルエットのなかに教会の塔を組み入れつつも、これをスヒーダム門の時計塔さえはるかにしのぐ高さに聳えさせたのである。皮相的な描き方をするかわりに、フェルメールは、光と影のコントラストを絶妙に用いて、見る者の注意を後景の新教会の塔へと導く、そういうやり方で、教会に眠るオラニエ公ウィレム一世の墓所を暗示することによって、歴史的かつ政治的なメッセージをさりげなく告げているのだ。

フェルメールは、同じように控え目に、オランダの「黄金時代」における

経済的な繁栄を記録している。デルフトは当時盛んな貿易によって莫大な利益をあげていたが、「デルフトの眺望」にはそうした活気に満ちた様相を示すところはない。港をつつむ雰囲気は奇妙な静けさであり、私たちの目の前にある町はむしろひっそりとしている。フェルメールは絵の中から日常の騒然としたありさまや慌しさをことごとく取り去っている。したがってフェルメールは大作の画題として故郷の風景を選んだとはいえ、描かれた場所が当時もっていた現実的な意義をなにも伝えない。デルフトがもつ都市としての特殊な地勢の意味を示すわけでもないし、当時の事件や歴史的事実を伝えるわけでもない。だからこそ、この絵を見る者はだれも雑音、喧騒、話し声、鐘の音などを連想することはない。前景の埠頭に見えるわずかな人影も声を忍ばせてじっと佇んでいるばかりだ。

この町に住むフェルメールの私生活の一端をうかがうことはできない。彼の全作品から家族の生活を見せる視点は除かれている。フェルメールの日常生活を支配し、疑いなく数々の騒ぎのもとになったにちがいない彼のたくさんの子どもたちはどこにいたのか、鑑賞者は自問する以外にできることはない。

17世紀のオランダ美術界では、遠近法を使って構成する技法、およびそのために役立つ機器に対する関心が異常に高まったのだが、フェルメールは彼の同時代の画家と同じようにはこの熱に浮かされることはなかった。彼が光学機器を用いたかどうか、用いたとしてもそれがどのような器具を使っての試みであったかは、もはや現在では確かめようがない。彼の絵はこの点について、はっきりした証拠を示さない。「デルフト眺望」やその他いくつかの室内画における光と色彩の不鮮明な無数の斑点などを根拠にして、画面を構成する際にカメラ・オブスクーラ（「フェルメール神話」図⑭参照）を補助的手段として使用したかもしれないと推測するむきもあるが、歴史資料的にこれを裏づける証拠はない。また、このようなことは彼の絵の本質的意味を分析するためには最終的には重要ではない。フェルメールの絵は写真のよ

うな写実性ではなく、事物にたいする決然とした芸術的視点に特徴があるからだ。結論的にいえば、一方におけるフェルメールがおかした地誌的な事実からの逸脱、他方におけるディテール表現のリアリティ、これら二つの事柄の弁証法的な関係こそ注目すべきことなのである。ディテールの表現においてフェルメールは惜しみなく細心の注意を払った。小さな部分ひとつひとつが十分に配慮され、また尊重されているので、それぞれの細部は、絵画全体のコンテクストから離れたとしても、自立して存在することができ、それ自体の意味を獲得できるのだ。

こうした考察から、フェルメールと彼の同時代の画家との最大の相違は、モチーフを芸術的に変換する独特の方法にあるということがわかる。フェルメールほど描画技法を自在にこなし、技法から得られる表現の可能性を知悉していた者はデルフトには一人もいなかった。精巧な発明品を用いて描いた同時代の画家のなかに、フェルメールほど最小のディテールにまで十分注意を払って仕事をした者も一人もいなかった。例えばダニエル・フォスマールやその他デルフト在住の同時代の画家たちは、遠近法を利用した構成に関心を集中する。つまりフェルメールとは異なり、いわば、遠近法から得られる現象的な要素に注意を奪われているのである。

それにしても、フェルメールの「デルフト眺望」はこの時代の他の都市風景画に較べて、密度の濃い芸術性をもち、迫力の強い印象を与えることにおいて群を抜いている。しかも地誌としての意味をもつ風景画のしきたりに縛られてもいない。絵の主題や挿話ふうの話題が、フェルメールの主たる関心、すなわち、描くことそのもの、絵画、構成、色彩、ディテール、またそれらすべてが人間の心に喚起する感動から、私たちの注意をそらすことはない。

したがってフェルメールが自分の視点でデルフトという都市を眺望するこの絵は、言葉の本来の意味からは「眺望」ではない。なぜなら、視線は「外へ」注がれてはおらず「内へ」向けられているからである。フェルメールが構想する絵は画家の内なる目に生まれる。現実の風景が、いわば精神のフィ

ルターを経て、吸収され、独立した絵画として変容し、あらためて、緻密に組み立てられる。

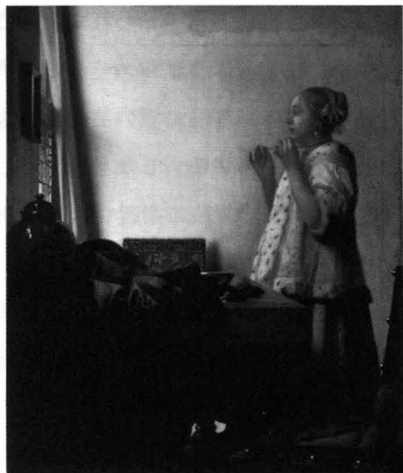
同じようなことはフェルメールの室内画（「青衣の女」「真珠の首飾り」参照）にも認められる。フェルメールの「デルフト眺望」は、同時代の画家た



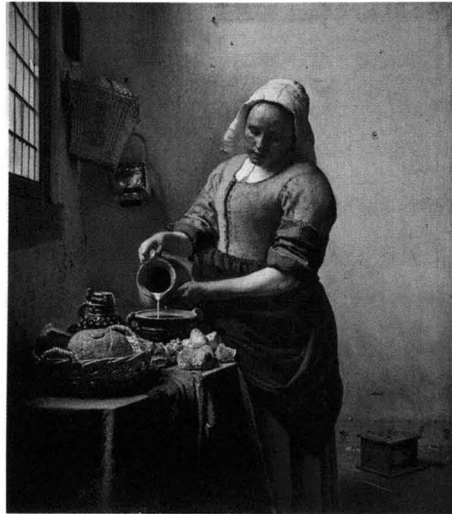
「青衣の女」



「恋文」



「真珠の首飾り」



「牛乳を注ぐ女」

ちの都市景観図にある地誌的な意味を欠き、主題がはじめてから別の方向へずらされている点で、風景画というよりは、室内画を思いおこさせる絵である。こうした事実は絵画に時間的な永遠性をもたらすと同時に、接近と隔絶、親近感と違和感、魅力と不可解といったアンビバレントな印象も生みだす。フェルメールは、騒がしい日々の生活現場から自分の芸術空間へ、すなわち本来の自分が没頭できる内面世界へと引きこもる。この絵を見る者は、画家のこの創造過程を追体験する。そのかぎりでは、見ることはやはり見る者にとっても創造行為なのである。「絵を描く」とは現実と幻想との間を不断に往還しつつ、具体的なモチーフを形象として確認できるかたちに再現することである。そうであるにもかかわらず、フェルメールの「デルフト眺望」は見る者に抽象的もしくは観念的な体験を得させる。この絵が今日までアクチュアリティを失わなかったのはそのためである。

時の流れのはかなさを越えて、フェルメールの作品は、今もなお現在から「降りて」、しばし立ち止まり、休息をとり、力を蓄えることを許してくれるのである。私たちはゆとりを与えられ、離れたところから自分の生に目を

やり、そうすることでおそらく、生きることの真の意味をなにがしか知るので。

(のじま・けんじ 政治経済学部教授)

「あとがき」に代えて

2005年の春から夏にかけて、野島健児と私はベルリンに居ました。フンボルト大学のゲストハウスに滞在し、彼は徒歩で行ける Berliner Ensemble (プレヒトの芝居小屋)に通い詰め、演劇鑑賞・研究に精を出していました。

一方、1, 2度つき合ったものの言葉がわからない私は演劇はご遠慮申し上げて、Kulturforum (文化フォーラム)にある Gemäldegalerie (国立絵画館)へ絵を観に通いました。

真新しく宏大な美術館の、おびただしい芸術作品群の中で特に心ひかれたヨハネス・フェルメールの《真珠の首飾り》と《紳士とワインを飲む女》の2枚の絵に魅せられて。

そして、ギャラリーショップで、イレーネ・ネッタの著作を手にしたのでした。

これを読みたいという熱い思いに身の程を忘れ、自分で読む意気込みだったのですが、実際には一語一語辞書と首っ引きという有り様で、あえなくギブアップ。

それを見かねて彼が翌年の夏休みに翻訳してくれたのがこの原稿です。

訳出にあたり、彼はドイツ語版のほか英語版はもとより、日本国内で出版された数多くの著作を参照しながら、選ぶ言葉や表現にこだわり推敲に推敲を重ねて、日本語として自然に読めるように腐心していました。

彼自身もフェルメールへの興味を深め、新しいことを知る喜びの中で楽しんで仕事を進めていたと思います。

2011年11月に病を得て入院した後、2012年3月「明治大学教養論集」通

巻484号に、第2章にあたる「フェルメールの『デルフト眺望』」がどの章よりも先行して掲載された時は本当に喜んで、フェルメールに関心のある医師や看護師に抜き刷りを差し上げるほどでした。これが励みとなって、病気も一時的に快方へ向かったのです。

2012年5月末に退院を許され、2013年3月には自宅で病を養いつつ、通巻492号に第1章にあたる「フェルメール神話」を発表。気持に弾みがついたのも束の間、その直後の4月に病気が再発し、今度は病院のベッドの上で、病氣と闘い勝利する決意表明として「執筆申込」をしました。

元氣になって第3章、第4章と続けて発表するつもりだったのですが、悲しいことにそれを見ることなく不帰の人となってしまいました。

しかし原稿はパソコンの中で完成された形で残っているのです。

これは、私に何とかして世に出してほしいという彼からのメッセージ（宿題）と思えて、教養論集編集委員の方々をお願いして、こうして全章が俯瞰できる形に文字どおり首尾一貫することができました。

私にできることは何でもしてあげると約束していたことのひとつが、こうして果たせて少し肩の荷をおろせたように思っていますが、何といたっても彼が一番喜んでくれていることでしょう。

これもひとえに編集委員の皆様のご理解とご寛容のたまものと、「明治大学教養論集」に携わられたすべての方々にご心より深く感謝致します。

尚、イレーネ・ネッタ著「デルフトのフェルメール — 画家とその都市」(Irene Netta: Vermeer van Delft — Ein Maler und seine Stadt, 2001 Prestel Verlag)の巻末には現存するフェルメールの絵画37点のカラー図版一覧がついているのですが、それらは現在日本で出版された様々な出版物やカタログでよく知られるようになりましたので、この稿では割愛致しました。

2013年 暮

野島 悠美